健診でチェックされた子どもの母親の心理

巷野　悟郎（東京家政大学）
中村　安秀（都立神経病院）

はじめに

乳児健診はかつては，子どもが順調に発育しているかどうか，病気があるかどうかという点を中心に行なわれていた。ところが，ここ10年ぐらいの間に，脳性麻痺の早期発見・早期治療が謳われ，乳児健診の中心的な課題は乳児の神経学的発達チェックに重点がおかれる傾向にある。子どもの発達には大きな個人差があるので1回きりの健診で正確な判断を下すのは不可能に近く，発達チェックをきちんとした形でするならば，健診後の経過観察が必要となる。

我々は，健診でチェックされ，経過観察を受けた子どもの親が，どのような不安を訴えているのかを調査したので報告する。

対　象

東京都府中保健所において，1984年1月より6月までに経過観察クリニックを受診した100名の乳幼児の家族に対して，保健婦が直接聞きとりアンケート調査を実施した。

健診でチェックされたあと経過観察に来るまでの間の不安の具合により，次の3群に分け，個々の要因との関連を調べた。

A群：不安を持っていた
B群：あまり不安を持たなかった
C群：全く不安を持たなかった

結　果

(1) 不安度と生下時体重の関連

不安の強いA群37名，やや不安の残ったB群45名，不安を持たないC群18名であったが，A，B，C群と生下時体重の間には相関を認めなかった(表1)。

(2) 不安度と出生順位および母の年齢との関連

表2・表3においてみられるように，出生順位や母の年齢と不安度の間に特に相関はみられなかった。第3子・第4子だから不安が少ない，母の年齢が高いあるいは低いから不安が多いという傾向はみられなかった。

(3) 不安度と周生期トラブルとの関連

周生期の種々のトラブル(仮死，黄疸，早期破水など)を持つ場合に不安度の高い傾向はみられたが，はっきりとした有意差は認められなかった(表4)。

(4) 不安度と健診におけるチェック理由との関連（表5）

健診におけるチェック理由を，発達に関するものと，それ以外の理由の2つに大別した。発達に関するチェックの内容は，首すわりが不十分である，そり・つっぱりが強い，筋緊張が低下している，大泉門の大きさが大きすぎる，あるいは閉じかけている，追視が不十分である，ということであった。表は延人数で検討したものだが，発達を理由にチェックされた延49名の子どものうち，A群25名，B群19名，C群5名であった。発達以外の理由でチェックされた延78名中，A群20名，B群42名，C群16名に比較して，明らかに発達を理由にチェックされた場合にA群の比率が高く，χ^2 検定により1％の危険率で有意であった。

(5) 未来所者に対する調査

健診でチェックされたが，保健所で行なわれている経過観察に受診せず，今回のアンケート調査の対象外となった児について調査した。というのも，健診後に不安が強かった場合，後日の保健所での再呼出しまで待てずに，他の医療機関を受診する場合が多いからである。表6のように，19名中9名と約半数がすでに他機関を受診していた。

考　察

乳児健診でチェックされた子どもの親のうち，37％

は再呼出しを受けたことで不安を抱き，不安を持たなかった親は18%にすぎなかった。また，チェック理由が発達がらみの時に，不安を持つ傾向が強くみられている。

この報告の結果より，3～4カ月という親子の安定した結びつきが必要な時期に，健診でチェックされたことによる不安を持ちつつ子育てしている現状が見出された。このことは，現在行なわれている乳児健診の発達チェックのあり方に再考を促すものと思われる。

なお，本研究にあたり多大の協力をいただいた東京都府中保健所高尾幸江予防課長および保健婦の方々に感謝いたします。

表1　不安度と生下時体重

体重(g) ＼ 群（人数）	A群	B群	C群	計
2000g以下	1			1
2000 ～ 2499	4	5	1	10
2500 ～ 2999	12	12	6	30
3000 ～ 3499	17	19	10	46
3500g以上	3	9	1	13
計	37	45	18	100

表2　不安度と出生順位

出生順位(第何子) ＼ 群（人数）	A群	B群	C群	計
1	15	28	10	53
2	15	11	5	31
3	6	3	3	12
4	1	2		3
5		1		1
計	37	45	18	100

表3　不安度と母の年齢

母の年齢(歳) ＼ 群（人数）	A群	B群	C群	計
19歳以下	1			1
20 ～ 24		6	5	11
25 ～ 29	19	21	6	46
30 ～ 34	11	9	5	25
35歳以上	5	9	2	16
不　明	1			1
計	37	45	18	100

表4　不安度と周生期トラブルの有無

トラブルの有無 ＼ 群（人数）	A群	B群	C群	計
な　し	21	29	15	65
あ　り	16	16	3	35
計	37	45	18	100

表5　不安度と健診におけるチェック理由

経観理由 ＼ 群（人数）		A群	B群	C群	計(延)
発　達	首すわり	10	11	3	24
	そり，つっぱり	5	4	2	11
	筋緊張低下	6	2		8
	大泉門	2	2		4
	追視	2			2
その他	体重	7	19	6	32
	股関節	2	6		8
	他	11	17	10	38
計(延)		45	61	21	127

表6　未来所者の経観理由およびその後の状況
(19名)

経観理由	人　数	その後の状況		
		他機関受診	保健婦フォロー	転　居
体　重	7	2	4	1
発　達	7	3	4	—
その他	5	4	1	—

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

乳児健診はかつては,子どもが順調に発育しているかどうか,病気があるかどうかという点を中心に行なわれていた。ところが,ここ 10 年ぐらいの間に,脳性麻痺の早期発見・早期治療が謳われ,乳児健診の中心的な課題は乳児の神経学的発達チェックに重点がおかれる傾向にある。子どもの発達には大きな個人差があるので 1 回きりの健診で正確な判断を下すのは不可能に近く,発達チェックをきちんとした形でするならば,健診後の経過観察が必要となる。

我々は,健診でチェックされ,経過観察を受けた子どもの親が,どのような不安を訴えているのかを調査したので報告する。